



無事之名馬

菊池寛

無事これ名馬

時として、競馬関係の人から書を求められたりした場合に、僕はよく「無事之名馬」といふ文句を書き流してきた。そのために、この文句が、意外に有名になつてゐるさうだが、決してこれは、僕の創意になる文句といふわけではない。

「無事之貴人」といふ有名な文句がある。僕はただこれをもちつて書いてみたまでだ。色紙をつきつけられて、その時、これと思つて、書いてみたいといふ文句も、別段、思ひ浮ばなかつたので、突嗟に「無事これ貴人」をもちつて、「無事これ名馬」と書いた。

それが初まりで、それから度々「無事之名馬」といふ文句を書き慣れてきた。

「無事之貴人」といふのは、改めて説明するまでもない。無事に、平和に暮してゐる人間が、結局は貴人なのだ、といふほどの意味なのだが、「無事之名馬」の場合には、少なくとも競走馬についていふと、案外に無事な馬が少くない。

従つて競走馬に關する限り「無事之名馬」といふ文句は、人間の場合の「無事之貴人」といふ文句以上に、適切な感じがないでもない。もしもこの文句が、多少とも有名になつてゐるとすれば、さういふ適切さの

れば、多くの期待も無様に裏切られてしまふ場合の方が多い。幾分誇張した云ひ方をすれば、馬主といふものは、僅かに二、三割の楽しみのために、七、八割もの心配と憂鬱とを賭けてゐるやうなものだとも云へるだらう。

馬主の身にとつては、せめても自分の馬が無事でレースに走つてゐてくれるだけでも嬉しいといふ氣持になる。折角馬を持つてゐながら、その馬がいつも故障でレースにも出られないといふのでは、馬主としては全く情ない。せめても無事でレースに出てくれれば、勝ち負けは別として、それだけでも幾分は慰められる。

それに、無事な馬でさへあれば、いつかは必らずチャンスにも恵まれる。いかに素質のすぐれた馬でも、故障になつてゐては、常にチャンスを見逃してゐなければならぬ。

ところが馬さへ無事なら、さういふ駿足の見逃してゐるチャンスに、自然にぶつかることになる。さういふ例は、これまでの競馬にも、數限りなく指摘できる。

馬主にとつては、少しぐらゐ素質の秀でてゐるといふことよりも、常に無事であつてくれることが望ましい。「無事之名馬」の所以である。

加藤雄策君

今年のダービーの二大候補が加藤君の馬である。

ダービーに於ける勝敗の如何に拘らず、加藤君のセントライトとブランドソールとが今年のダービーの二大候補であることを肯定しないものはないであらう。

しかも馬主としての加藤君のこの成功は、單なる好運だけの結果ではない。加藤君の馬に對する知識と熱心さとが、こんにちの成功を収めたのだと思ふ。

ためであらう。

ところで、馬主としての僕が、「無事之名馬」に値ひする馬を持つたことがあるかどうかと云はれると、それが抽籤馬だけに、敢然として答へるといふ程の氣持になれないところもあるが、ドラボーなどは幾分それに近い馬ではなかつたかといふ氣がする。ドラボーといふ馬は、最後まで競馬を休んだといふことがない。そしてどこでも、必ず一鞍はあげた馬である。かういふ馬は珍らしい。

トキノハナは、ドラボー以上に稼ぎもしたし、力量としてもすぐれてゐたであらうが、しかしあの馬は、幾分エビ氣味なところもあつて、必ずしも無事な馬であつたとはいひ得ない。さういふ意味で、僕ら持つてゐた馬では、ドラボーなどが一番「無事之名馬」の型に近い馬だつたと云へよう。

實際、馬主の身になれば、無事な馬ほど有難いものはない。

馬主の場合には、僕ばかりではなく、大抵の人がさうだと思ふが、樂しみを覺える割合ひに較べれば、心配や憂鬱を味はふ時の方が多い。馬を持つてゐることの楽しみが二、三割だとすれば、心配や憂鬱の率は、まづ七、八割にも及ぶであらう。それも、大部分は馬の故障から來るのだ。

レースの前にもいい加減心配しなくてはならないし、いざレースとなれば、多くの期待も無様に裏切られてしまふ場合の方が多い。幾分誇張した云ひ方をすれば、馬主といふものは、僅かに二、三割の楽しみのために、七、八割もの心配と憂鬱とを賭けてゐるやうなものだとも云へるだらう。

彼に一般の競馬知識を教へたのは僕であるが、彼自ら相馬觀においては字都宮さん（嘗て田中厩舎のハクセツ其他の名駿を持つてゐた）に負ふところが多いと告白してゐるから、馬主として彼がこんにちの大をなすまでには、僕と字都宮さんとの影響もあるわけだ。

彼は、調教師や騎手のなかでも、馬のわかるものは幾らもゐないと云つてゐるが、その豪語を相當引きつけて考へてみても、加藤君が、馬主中の有數な相馬家の一人であることは確かである。

第一、一頭の馬を買ふにしても、その熱心さと見識とは、到底普通馬主の及ぶところではない。方々の牧場へも見に行つてゐるやうだし、これと目星をつけた馬には、絶えず注意を拂つてもゐるらしい。あれでなくは、ほんとうの、天下の名馬を手に入れることはできないかも知れない。

馬主としての彼の成功が、單に、好運だけによるものではないといふのは、さういふ意味からである。

レースに對する馬の使ひ方にしても、彼一流の見識を以てしてゐることとは、クモハタが御賞典に負けても、その儘いさぎよく引退させてしまつたことでも分る。

賞金を稼がせるつもりならまだ使へるのを、惜しげもなく引退させてしまふ。ああ云ふ所は實に立派だ。

天下の名馬も、彼の如きに認められて、はじめて終りを全うし得るのかも知れない。

眞の伯樂とは彼の如きをいふのであらう。彼が、もう少し豪語を慎めば、一層理想的な馬主だ。